

スマホ所有期間の長いシニア、生活変化の実感 13~30pt 増加

株式会社NTTドコモ モバイル社会研究所

◆ポイント◆

- ・スマホによる生活変化を実感するシニア、所有期間が長くなると13~30pt増加
- ・購入時、スマホの利便性について興味を持つことが、シニアのスマホ利活用につながる

2019年10月30日のレポートでは、スマホを所有する全国の60~79歳を対象とした、スマホ所有による生活変化(11項目)についての調査結果から、シニアのスマホ利活用の度合いは性別や年代に大きく影響されないことを報告した。今回のレポートでは、“スマホ所有期間”と“所有のきっかけ”に着目した分析結果について報告する。

1. 調査結果：

1-1. スマホ所有によるシニアの生活変化(スマホ所有期間に着目)

— 所有期間が長くなると生活変化を実感 —

図1は、スマホを所有する全国の60~79歳を対象とした、スマホ所有による生活変化(11項目)についての調査結果をスマホ所有期間別に示したものである。

所有期間が1年以上、3年以上、7年以上と長くなるにつれ、11項目の全てにおいて生活変化を実感している割合が増加(項目毎13~30ポイント、平均24ポイント)する。これはスマホの所有期間が長いシニアほどスマホの利活用が、より進んでいることを示している。またシニアのスマホの利活用にはある程度の期間を要することも考えられる。

図中の矢印は、所有期間1年未満と7年以上とで25ポイント以上の差があった項目(11項目中6項目が該当)である。特に渋滞情報・カメラ機能・地図アプリ・商品検索等において、長期間スマホを所有しているシニアとそうでないシニアとの間に大きな差異が認められた。

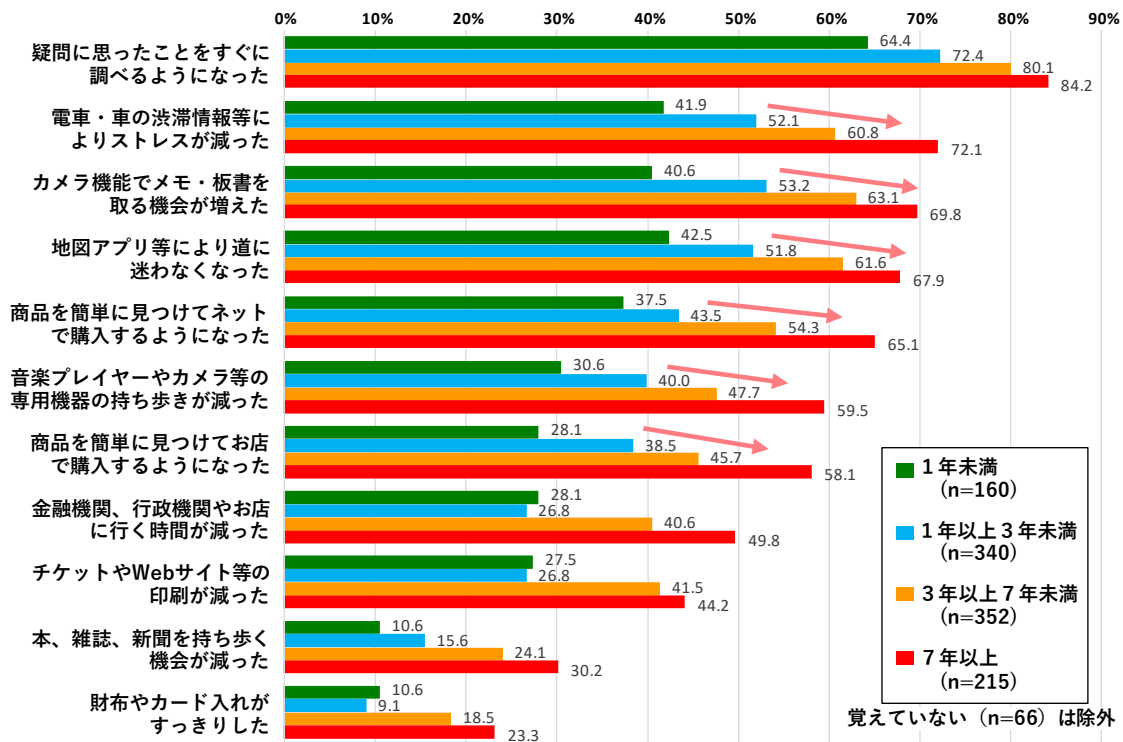


図1 スマホ所有による生活変化(複数回答) <所有期間>

1-2. スマホ所有によるシニアの生活変化(スマホ所有のきっかけに着目)

— スマホ所有のきっかけの内容により生活変化を実感 —

図2は、スマホ所有による生活変化について、はじめてスマホを所有した際のスマホ所有のきっかけに着目して分析した結果である。スマホ所有のきっかけとして、最も積極的・能動的と考えられる“使いたい機能・アプリがあった”という項目を1番の理由に挙げたシニアと、漠然とした“何となく”という項目を1番の理由に挙げたシニアの集計結果を、60・70代のシニア全体の集計結果と比較している。

11項目全てにおいて“使いたい機能・アプリがあった”と回答したシニアは生活変化を実感する割合が高く、“何となく”と回答したシニアは低くなっている。“使いたい機能・アプリがあった”と“何となく”との差は各項目で12～36ポイント、平均25ポイントであった。なお、両者におけるスマホ所有期間に大きな違いは見られなかった。今後、新たにスマホを所有するシニアがスマホを利活用するためには「スマホで出来ることについて興味を高めること」が有効と考えられる。

図中の矢印は、所有きっかけの違いにより25ポイント以上の差があった項目(11項目中8項目が該当)である。渋滞情報・カメラ機能・地図アプリ・商品検索等の項目に加え、“疑問に思ったことをすぐに調べるようになった”・“チケットやWebサイト等の印刷が減った”という項目にて大きな差異が認められた。

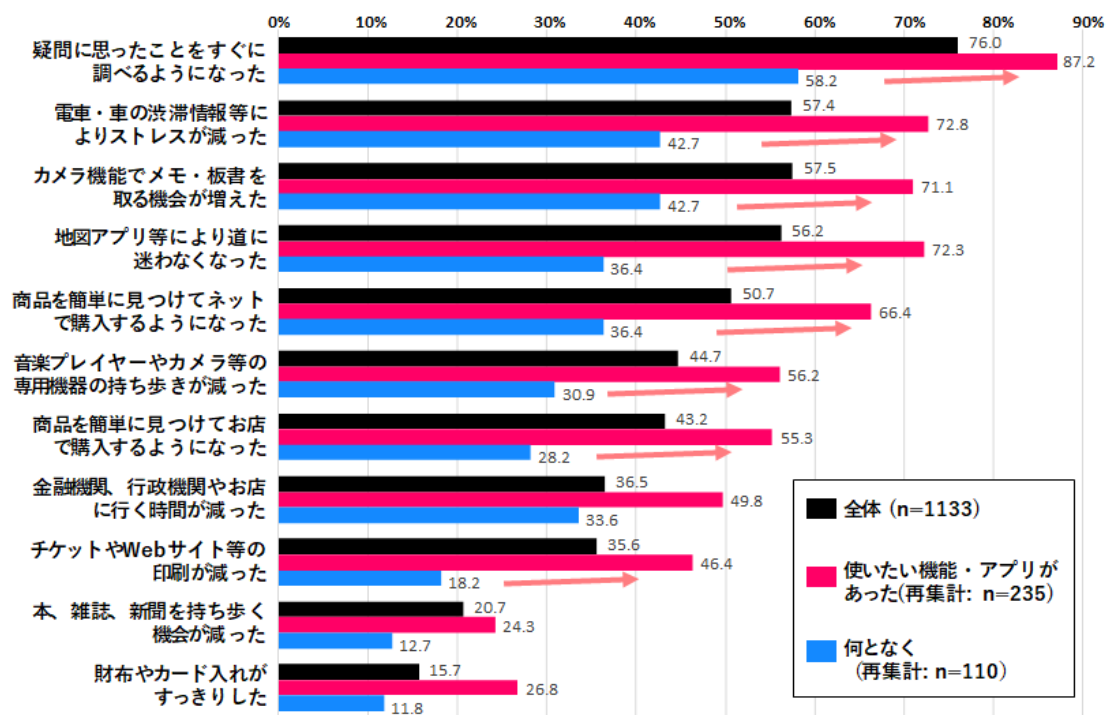


図2 スマホ所有による生活変化(複数回答) <所有きっかけ>

2. 調査概要 —「2019年一般向けモバイル動向調査」—

調査方法	ウェブ調査 (2019年1月実施)
調査エリア、対象者	全国、15～79歳の男女
標本抽出法	性別・年代(5歳刻み)・地域区分のセグメントで人口分布に比例して割り付け
有効回答数	6,926 [※]

※今回のレポートの分析対象は、スマホを所有する60～79歳の男女 1,133人

■ 問い合わせ先

詳細なデータ、質問項目など、ご不明な点がございましたら、下記までご連絡ください。

株式会社 NTT ドコモ モバイル社会研究所 msri-inq-ml@nttdocomo.com